

インターフェースを考える <その5>

人と情報をつなぐ

情報の媒体と『インターフェース』

今回は「メディア・情報・データベース」といった言葉をキーワードとして、人と情報をつなぐための「媒体」を『インターフェース』として考えてみたい。

プロジェクトの実施を通して、さまざまな情報を入手して、それを処理・加工したり、利用・発信することを求められることが多々ある。そうした際に「媒体」として活用されるものには、広報用のニュースレター、ブローシャー等や、データベース等がある。

広報とインターフェース

プロジェクトの広報用にはニュースレターが作成されることがよくある。ニュースレターに求められるものは、ニュースバリューとしての内容は大切であるが、速報性やタイムリー性も重要である。

一方、ブローシャーやブックレット等は、対象者が必要とする情報を提供したり、利活用することを目的として作成・配布される。この場合、利用者に合わせて内容や難易度を吟味したり、写真やイラストを使って理解しやすくなるような工夫が必要である。

マングローブ環境教育の際には、子供たちにマングローブ苗木植林の留意点を説明するためのブローシャーや、マングローブ林の野鳥観察用の野鳥リスト等を作成した。このブローシャーでは、イラストを使用して、視覚的・直感的に理解できるように努めた。また野鳥リストは、現地で実際に観察・撮影した水鳥類の写真を使って作成した。

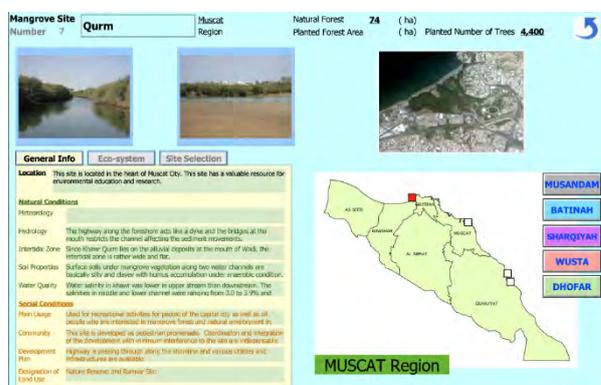


野鳥観察用の写真付き野鳥リストの活用

データベースとインターフェース

データベースはその名の通り、データ活用の際の強力なツールの一つであり、これまで我々が開発してきたものとしては、UAE の植物・種子図鑑、住所録、普及員名簿等がある。最近ではタブレットも普及してきており、iPad を使ったマングローブ植林サイトデータベースも作成した。

データベースの場合は、データを加工してどう見せるかがデータ活用法として重要である。この「見せ方」はまさに『インターフェース』であり、地図情報も使った GIS との連携によってより有効利用できる場合がある。



iPad によるマングローブ植林サイト DB では、地図情報や衛星画像の他に、サイトの一般情報や、そこに生息する動植物が紹介されている。内容は利用者の知識要求に対応して可変でき、追加的に情報を膨らませることによって、一般の人々から専門知識を必要とする森林レンジャーまで幅広く活用できる。

相手への想い

「人と情報をつなぐ」場合、言うまでもなく何を伝えたいのかが重要であり、①情報の内容、及び②伝え方（データの加工法や見せ方）によって、その結果は大きく異なってくる。

この場合、相手に分かるように伝える、という基本的な考え方の他に、対象者の知識水準や求めていることに応じて内容や伝え方を変えることができればより伝わりやすくなる。

情報を伝える先の「相手」に対する想い、相手が何を求めているかということに対する思いやりが必要であり、発信する側の「独りよがり」にならないような配慮が求められる。